

平成24年度社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

『新しいスタイルの博物館を活用した住民主体の
持続的な地域文化継承モデルの研究』

都留市教育委員会

～ 目次 ～

I 本研究の予見

1. 本研究の目的	2
2. 研究会の実施概要	3
3. 対象施設について	5

II 実施内容 ～研究プロセス～

1. 考えるきっかけや切り口を共有する	7
2. 予見を共有する	8
3. 施設のコンセプトを見直す	10
4. コンセプトを伝える手段を考える	11
先進地視察研修	
その1 キッズプラザ大阪	11
その2 有馬富士公園	16
その3 兵庫県立考古博物館	20
5. 試験的に来館者に提供してみる	23

III 検証と展望

1. 何を伝えるか?	29
2. 日常生活につながる“伝え方”について	32
3. 市民や来館者と魅力をつくる組織の運営について	36
4. まるごと博物館つる構想の位置づけや全体計画の必要性	38
5. 親子のつながり、参加者のつながりをつくり学ぶ効果の検証	39

I. 本研究の予見

1. 本研究の目的

～これまで培われてきた生活文化の継承と社会教育施設の活用方法の再検証～

無縁社会という造語が話題になったが、現在、これを象徴するかのよう、都市部では近隣住民、さらには隣人同士のつながりがなくなり始めている。この現象は、徐々に農山村地域にも表れ始めている。地域の特徴や、地域の中での培われてきたつながりの意味、地域住民自身による相互扶助や地域自治組織の機能等の喪失の危機が迫っており、地域住民の郷土愛の希薄化も進んでいる。これに伴い、地域住民同士のつながりが希薄化し、地域力・住民力といった地域を維持するために必要な力の低下が顕著になってきている。

これに伴い、都留の風土の中で生まれてきた暮らし方など、地域文化の継承も途絶えつつある。こうした課題に対する市民の危機感も強まっており、昨年度に市民主導で開催された地域課題を考える会においても、地域文化の発掘や継承の必要性が指摘された。

こうした事態の背景には、地域社会のインフラの希薄化がある。本来、人と人のつながり作りや、郷土学習による郷土愛の醸成、地域文化の継承の拠点として地域の社会教育施設がつけられたが、効果的に機能していない部分がある。本研究では、社会教育施設がこうした機能を取り戻し、さらには日常生活にこうした文化を再び根付かせることができるよう、メッセージを伝える効果的な伝える手法や施設の運営方法等を研究する。これについて、これまでの“見せる”“学ばせる”という情報の出し方が一方向の施設活用方法だけではすでに限界が見えている。特に、日常生活に再び文化を根付かせるとなると、現状のままでは非常に難しい。よって、社会教育施設の現状を踏まえ、“関わる”“学びあう”といった多くの人が主体的に関わる新しい施設活用方法を検討する必要がある。

また、本来こうした社会教育施設は、住民によるまちづくりのための拠点施設であり、住民自治のための知識やスキルを学びあう場であった。そのため、施設運営についても、住民自治により運営されていた。今回の研究を通して、社会教育施設が再び住民が共に学びあえる場となり、市民と行政が役割分担を明確にする中でともに運営する体制を築けるよう、研究を進める。

2. 研究会の実施概要

本研究では、人と人のつながり作りや、郷土学習による郷土愛の醸成、地域文化の継承の拠点機能を持つ社会教育施設を生み出すため、以下の点を中心に研究を進める。

- ・ 伝承された生活文化を日常生活へとつなぐための効果的な手法
- ・ 施設のコンセプトに合った取り組みを継続できる運営方法
- ・ 市民と行政がともに運営し、市民の自己実現の場となる施設の運営方法

これについて、都留市の自然体験活動の拠点である「宝の山ネイチャーセンター」を活用し、原点としての都留の自然とその暮らし、地域文化を取り上げ、地域住民、その他のステイクホルダーを集め、参加型の体験や展示を創り、実践、検証を実施した。

《具体的な内容》

その1 共通認識づくり (第1回研究会)

社会教育施設の活用方法について検証するにあたり、一緒に考えていくうえでイメージの共有や共通言語作りが必要となる。そこで、社会教育施設のイメージ像について共通認識を確認し、それぞれが社会教育施設に求めたいものなどについて情報交換した。



研究会の様子

その2 施設情報や関係する計画の進捗状況、予見の整理 (第2回～第3回研究会)

施設の現状(施設の面積や実施できるプログラム内容等)や、このネイチャーセンターも含まれる「宝の山」のフィールドの入込客数、土砂災害等に係る規制等、フィールドのポテンシャルについて確認した。また、ネイチャーセンターも含まれる市内博物館施設(博物館相当施設)全体の計画である「まるごと博物館つる」構想についても確認した。

その3 施設コンセプトの確認 (視察研修～第4回研究会・第7回研究会)

施設コンセプトは存在するが、上位構想である「まるごと博物館つる」構想と照らし合わせたとき、それを実現するための道筋が不明確な部分があり、コンセプトと手法の整合性について評価できる軸が必要ということが分かった。よって、これまでの施設の実践内容も振り返りながら、施設コンセプトについて再度確認した。



まるごと博物館つる マップ

その4 視察研修による検討のための材料集め (視察研修)

～自然系施設等ハンズオン展示導入施設～

自然系施設では、来館者が展示づくりに参加することで展示を充実させる参加型展示等、魅力的な展示の手法や情報発信の手法を取り入れている施設が多い。こうした施設を見学することにより、展示をはじめとした伝える手法について学ぶ。有馬富士公園学習センターと兵庫県立考古博物館を視察した。



有馬富士公園内学習センター施設見学風景

～子ども博物館～

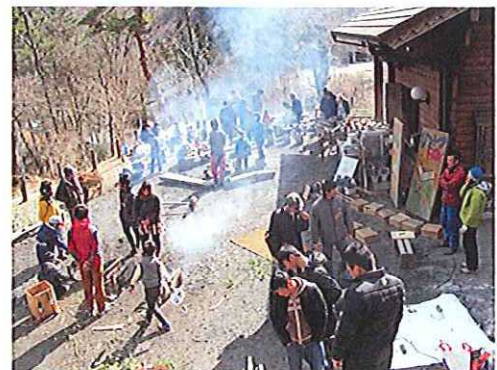
子ども博物館のうち、多くの住民等との関わりの中で運営しているなど研究会の目指す方向性に近い施設を見学し、運営スタッフ等へのヒアリング調査や、プログラムの内容等に関する情報収集をする。キッズプラザ大阪を視察した。

その5 伝える手法についての検討 (視察研修～第7回研究会)

口頭で伝える手法や、展示等によりセルフで伝える手法もある。手法によっては、元々興味関心のない方を活動に引き込む効果や、さらなる新しい情報を引き出す効果など様々な効果生まれるため、今回の研究の大きな核となる部分である。

その6 実証実験と検証 (実証実験～第7回研究会)

展示などの手法を検討して実施し、子どもと大人のそれぞれのターゲットに対する効果を検証する。また、一連のプロセスを振り返り、主体となって関わる住民を増やす効果や、日常の行動を促す手法などについて検証した。



実証実験イベントの実施風景

《実施スケジュール》

平成24年10月31日	第一回研究会開催
11月26日	第二回研究会開催
12月13日	第三回研究会開催
平成25年 1月 5日	国内先進地視察研修 (～6日)
1月10日	第四回研究会開催
1月21日	第五回研究会開催
1月30日	第六回研究会開催
2月 9日	実証実験イベント開催
2月28日	第七回研究会開催

3. 対象施設について ～宝の山ふれあいの里ネイチャーセンターの概要～

本実証研究の対象となる施設である「宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター」は、都留市の西に位置し、三つ峠や清八山、鶴ヶ鳥屋山などの山々に囲まれた、自然豊かな施設である。この施設では、“自然と人がふれあい・親しみ、体験を通して、自然の素晴らしさや人と自然のかかわりについて知るための場”として平成5年より運営を開始し、以降、周辺フィールドの自然への興味を引き出すことを目的とした展示の設置や、自然の中で遊び学ぶプログラムなど、自然を知っても



ネイチャーセンター外観



ネイチャーセンター所在地

らうためのきっかけを提供し続けてきた。

現在、学芸員が1人業務にあたり、平成23年度は年間20本のプログラムを実施し、220人が参加した。また、団体受入指導を49団体(1,539人)、出張授業等を19回実施している。施設利用者は、下の表の通り3,223人であった。

表1 平成23年度ネイチャーセンター利用状況

月	市内		市外		県外		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4	7	124	1	15	0	0	8	139
5	11	232	2	85	0	0	13	317
6	4	148	1	15	3	270	8	433
7	8	339	0	0	3	219	11	558
8	3	91	3	205	2	280	8	576
9	3	113	0	0	1	90	4	203
10	9	342	0	0	0	0	9	342
11	8	209	0	0	0	0	8	209
12	4	127	0	0	0	0	4	127
1	4	43	1	15	0	0	5	58
2	3	39	0	0	1	20	4	59
3	6	164	0	0	2	38	8	202
計	70	1,971	8	321	12	917	90	3,223

Ⅱ. 実施内容 ～研究プロセス～

1. 考えるきっかけや切り口を共有する

「みんなが来てくれる社会教育施設とはどんな施設?」「どんな施設にすれば、学びが生まれ、日常生活につながられるか。」

本研究会で検討したい事項を共有したが、あまりにも漠然としたテーマであるため、これだけではどこから手を付けてよいのか不明確であった。そこで、社会教育施設のいくつかの事例を共有し、これをきっかけに、いくつかの切り口で意見を出し合い、考えを共有した。

以下、情報共有の中での出された意見である。

◆施設のコンセプト等について

- ・ネイチャーセンターだけでなく都留市の博物館全体のコンセプトも視野に入れるべき。
- ・生活文化継承に取り組み、最終的に何をを目指したいのかを明らかにすべきである。
- ・“なつかしい未来”という言葉があるが、今回の事業に当てはまりそうである。自分でせいかつを作る力を養うことができる、その力の継承がテーマとなるのだろうか。
- ・今まで続けられてきたこと（農業やものづくり、生活づくり等）を改めて体験し、楽しさを感じ、生きる力を育んでもらうことこそ、生涯学習だと思う。このような力を持っているのは、60～80代の人のみになった。これらの方から技術を継承してもらえる場となればいい。

◆運営方法や伝える手法について

- ・暮らしの中で暮らしを作る体験を実施し、その体験の中で作ったものを販売し、人件費を稼げば、運営のインセンティブを付与できる。すべてボランティアでの運営は無理である。社会教育施設で活動を提供してくれる方々にも、インセンティブが必要。
- ・今の宝の山は、学芸員で動いている。これにシステム的に動ける部分も育てなければならない。
- ・今回の事業から生まれる体験を、“生活の営みを、手伝いをしながら学べる”という形にして、手伝いとして受け入れ、体験してもらってはどうか。
- ・継続的にできるシステムを考えたい。柏崎の施設では、施設オープン前からスタッフの育成に取り組み、OJTなども取り入れていたが、想いの相違などもあり難しい部分もあった。あえて“手放す（想いは共有し、手法は任せる）”ことも、継続のためには必要かもしれない。“市民”でプログラムを提供する部分を見ると、あまりに“質”で縛るのは難しいかもしれない。

◆“都留”というフィールド（地域）を考えて

- ・「宝地域」でやってきたいこと（生活）を生かしたことがよい。
- ・都留市民のなかで、“出たがり”の方が少ない。少人数を相手にしたり、普通に作業をしているところを見てもらうなど、手法を少し考えることで市民にも入ってもらえるように思う。

2. 予見を共有する ～施設のポテンシャルや設置している都留市の計画など～

(1) ネイチャーセンターの予見整理

ネイチャーセンターについて検討するにあたり、すでに決まっている(変えることができない)事項や、施設を保有する都留市として考えていただきたい予見等が存在した。よって、検討を始める前に予見を整理した。内容については、以下のとおりである。

～宝の山ネイチャーセンターの予見～

◆ランニングコスト等、施設の維持を見据えて考えてほしい

今後の運営を考えると、できる限り施設の維持に人やお金を割かずできる経営重要。

◆今あるものを有効に活用したい

川のサテライトなど、現在あまり使われていない部分を生かすことができないか。

◆周辺住民に配慮してほしい

過去、うるさいと苦情が入ったこともあり、配慮が必要である。

◆条例等の位置づけ等を見ながら考えてほしい

～施設に係る条例等に記されている内容～

目的としているもの

- ・豊かな自然環境を活用した農村地域の振興発展
- ・豊かな自然環境の保全のための自然とのふれあい、理解の深化

施設で実施しなければならない内容

≪施設管理≫

- ・施設等の維持及び管理に関する業務
- ・施設等の利用の許可に関する業務
- ・これらに付随する業務

≪施設運営≫

- ・4月1日から11月30日まで開館
- ・午前9時～午後4時まで開館
- ・月曜日や休翌日、年末年始は休館

≪事業運営≫

- ・自然観察についての指導及び普及
- ・自然保護業務
- ・自然の仕組みについての調査研究

施設での実施を禁止していること

- ・公の秩序や善良な風土を乱す活動
- ・施設や備品を損傷する恐れのある活動(火気の仕様または喫煙は定の場所で 等)
- ・管理上支障のある活動
- ・災害時の運営(ネイチャーセンターが土砂災害特別警戒区域内のため)
- ・営業または営利目的の活動

◆その他

- ・この施設は、“まるごと博物館つる構想”にも位置付けられている。
- ・昔、鉱山であったため、近隣にカドミウム堆積所などがある。フィールドを活用する際、注意が必要である。

予見の確認作業の中で、ネイチャーセンターのような単独施設ではなく、都留市の博物館施設（または博物館相当施設）全体を網羅したフィールドミュージアムの構想である“まるごと博物館つる構想”も同時に検討すべきとの意見が出された。この“まるごと博物館つる構想”では、自然や歴史の部分についてはすでに多くの素材が拾われており、その方向性等にも言及している。よって、これを一度評価し、自然や歴史を取り巻く生活にも触れていくことで、都留市として見



まるごと博物館つる 構想図解

せたいものや体験させたいもの、売り出したいものの方向性を示すべきとの方向性でまとめ、「まるごと博物館つる構想」を念頭に置き、サテライト施設の一つであるネイチャーセンターを先行して再検証し、施設のコンセプトの再確認方法等を他の施設へ波及させていくこととした。

(2) それぞれの施設やゾーンをつなぐ構想“まるごと博物館つる構想”の検証

この構想は、地域の資源を発掘し、町全体を博物館としてとらえて見せることで、

市民や観光客が特色ある歴史・文化に触れられるまちや、特色ある歴史・文化を求めて市外から観光客が来るまちを目指した構想である。この中では、市内の博物館や博物館相当施設がサテライト施設として位置付けられ、役割を振り分けられている。例えば、宝の山ネイチャーセンターは「自然とふれあうゾーン」という役割を担っており、これまで自然と人をつなげる活動を推進してきた。現在、この構想は推進できていない部分が多い。そこで、この構想がなぜ推進できていないかについて、検証した。

この構想では、具体的な実施内容は書かれているが、実施方法やそれに用いる具体的な伝える手法については毎年考えていくこととしているため、詳細は書かれていない。よって、市は「市民協力員体制で推進しているので、協力員が実施してくれる」と考え、協力員は、「活動にはもちろん協力するが、市が主体的に取り組んでくれる。」と考えていた。このように、市民（協力員）と市との間の役割分担が不明確だったことが、一つの原因である。また、事業に対する行政の関わりが見えないと、市民（協力員）のモチベーションに影響する。

これらから、市民や市民活動団体等の方々に協力していただく場合、双方が関わる中でお互いの役割を確認し、役割分担を明確にするべきということが学びとれる。

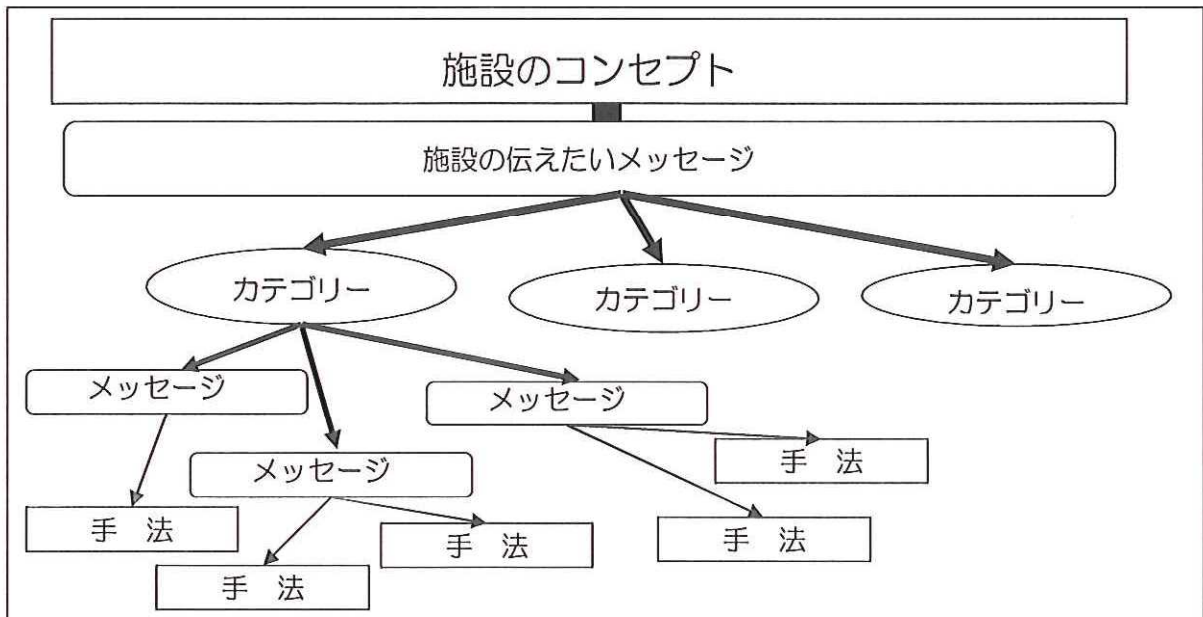
3. 施設のコンセプトを見直す

～施設の在り方について整理する～

- ・どのような機能を中心に持たせるなど、コンセプトのイメージをクリアにする必要がある。
 機能：博物館機能：研究分野を発達させるなどの方向性になる。
 公園機能：「開放感」「安全性」「バリアフリー」「自由さ」などを備えるデザインも考える必要がある。
 住民が自分の分野を発揮できる機能：ハード面の整備が必要。屋外フィールドはOKだが、屋内のスペース、空間の多様性が低い。
 キャンプ場機能：宝の山はフィールドの構造的にこれが強いかも。
- ・ターゲットやメッセージ等を明確にする必要がある。
 → だれに、なんのために、なにを伝えたいのか？対象者の顔や表情が頭のなかに浮かぶくらい明確にする必要がある。
- ・まずは行政がやりたいことや実現させたいことを明確にし、そのうえで一緒にやっていく体制を作るべき。本気度が見えるように組み立てるべき。
- ・どのようなものを伝えたいか、カテゴリーを整理するべき。
- ・宝の山の魅力を再確認し、ここに来たら何ができるということを明確にしたほうがよい。

こうした施設の在り方をもとに、人を導入しなくても、人を介さなくても、遊びにきたくなる、知的欲求を満たす部分（研究と調査の集積）とワクワクできる部分（アート、ユニークさ、体験型）を両方盛り込む必要がある。

しかし、まずは施設の伝えるメッセージを戦略的に見ることができるよう、以下のフレームに当てはめてみることで整理を図った。なお、整理した結果については第三章の検証と展望に記す。



4. コンセプトを伝える手法を考える

伝える手法は、来館者に直接見える部分であり、それによっては、どんなに素晴らしい素材を用いたとしても全く心に残らないものにもなってしまいます。まさに、この部分は施設の魅力等が表面化される部分である。

この手法の検討材料を集めるため、国内先進事例の視察を実施した。この視察研修では、特に体験から自分で学びとる“ハンズオン”の要素を取り入れた展示を提供する施設に訪問することとした。これが、これまでのネイチャーセンターについて分析する中で、「学芸員等によるプログラムのない時には人が訪れない。人がいないときにも学びを提供できる素材を増やす必要がある」ことが浮上したためである。

◆先進地視察研修

その1 キッズプラザ大阪

《基本的な情報》

この施設は、大阪市中央、扇町に位置する、小学校高学年の子どもや親子をターゲットとしたチルドレンズミュージアムである。運営については財団法人大阪市教育振興公社が委託を受けている。年間延べ45万人が入館し、年間パスポートを購入しているコアな利用者を1,300人集めている施設である。



キッズプラザ大阪 外観



広いフロアにたくさんのハンズオン展示が配置されており遊園地を感じさせる施設内フロア

関西テレビの保有するビル1階、3階の一部と、4階、5階の全フロア（延床面積 8342.79m²）を借り、展示とプログラムで子どもたちに様々な学びを提供している。施設を運営する正規のスタッフは34人（平成22年4月）であり、これに加えて300人のボランティアスタッフがプログラムの提供や展示の子どもたちの安全管理を支援する形で運営している。こうした施設の大まかな予算構成は、以下の通り。

《表2 キッズプラザ大阪 予算構成（概略）》

収入	入館料収入	2億5000万円
	大阪市運営補助金	1億円
支出	スタッフ人件費	1億5000万円
	施設維持管理費（光熱水費、メンテナンス費）	1億5000万円
	企画事業費	5000万円

※このほか、大阪市が関西テレビに対して賃貸料を支払っている。

《施設のコンセプトや想い》

子どもの視点や目線に立ち、子どもに対して様々な体験を提供することで、日常生活に隠れている驚きや、こうした現象を初めて発見した科学者の驚きなどを追体験してほしいという想いがある。また、これらを通じて創造性や可能性、個性を伸ばしてもらうことを意識している。

加えて、この施設を通じて幅広い人とのふれあいや 自分以外の人の考えや感じていることについて思いを巡らせる力や、物事をこれまでとは違った見方でとらえる力を養ってほしいという想いで、展示やプログラムを提供している。

《メッセージを伝える手法の特徴》

展示とプログラムで学びを提供しているが、特に展示を介しての学びの提供に特徴がある。展示は、普通の博物館と違い、展示物を手に取り、動かし、体験してもらうことができるハンズオン展示を中心に、展示を配置している。こうしたハンズオン展示の多くは、ボストンなどのチルドレンミュージアムを参考に専門業者に依頼して作成しており、生き物日記やルーペなど、情報更新を必要とする部分や簡易な部分については、担当のアイ



手に取り、動かし、体験から学びを提供してくれるハンズオン展示



情報更新を必要とする展示を織り交ぜ、生の情報を伝えて興味を誘う

ディアも含みながらで手作りしている。常設のものは更新が難しい中、少しでも新しいものを提供できるよう、スタッフの心配りにより新しい情報を更新し、魅力を維持している。また、常設の展示についても、「子どもが触っているか」「メッセージが伝わっているか」などの点で評価し、年に数回展示を更新している。

こうした展示は、基本的にはセルフで使ってもらうことを想定しているため、人がいなくても使い方がわかり、メッセージが伝わるように作られている。使い方や伝えるメッセージがシンプルでないと、メッセージが伝わらず、そもそも使いたいという魅力がなくなるため、手にも取ってもらえなくなってしまう。施設のスタッフは、「どうすれば手に取ってもらえるか」「どうすれば伝わるか」を常に意識しながら提供している。

この施設は、子どもや親子（基本的に小学校5年生）をターゲットに考え、展示やプログラムを作成しているが、来場する子どもが徐々に低年齢化しており、スタッフは、展示等を通じてこちらが伝えたいメッセージが伝わりにくくなっていると感じている。そのため、施設のコンセプトやターゲットを再度確認し、伝えたいメッセージや、それを伝えるための手法の妥当性などを常に考えながら運営している。

《運営方法について》

キッズプラザ大阪では、正規のスタッフのほか、プログラムの実施補助や子どもたちの安全を守るため、ボランティアスタッフとして関わる市民を募集している。これは、普通の博物館とはちがいで、ハンズオン展示の配置やプログラムの実施など来館者に対して説明や支援を必要とするものが多いためである。

ボランティアスタッフは、事前に3時間の研修を4回と1日の研修を1回受講してもらい、その後5年間、インタープリターボランティアとして施設の運営に関わってもらう。このボランティアには、最長5年という任期を設けており、その後は協力スタッフという関わり方をしてもらう。インタープリターボランティアに任期を設けた理由は、ほかの施設と比べて多くのボランティアを囲う施設となり目立つようになってしまったという外との関係性からの理由や、正規スタッフに契約職員が多いため、ボランティアスタッフの方が古株となる場合に起こりやすいボランティアの暴走など組織体制の乱れを防ぐ意味もある。



施設スタッフによるワークショップ風景。こうしたプログラムを数時間おきに実施している。



ボランティアスタッフによるイベントブース。子どもとのふれあいを楽しんでいる。

ボランティアスタッフも含め、月に1回、300人のスタッフがすべて集まる会議を実施（2日に分けている）している。（毎回7割のスタッフが集まる）また、ボランティア間の情報共有のため、月に1度リーダークラスが集まる情報交換会議を開催し、施設の運営や来館者対応等を確認し徹底している。

現在、正規スタッフは、マネジメント等をこなす8人のプロパーと、展示やプログラムのプランニングをする8人の契約社員、施設管理などをする3人のプロパーで構成されている。5年ほどで退職し別の職場に移るスタッフが多い。また、インタープリターボランティアは毎年100人程度募集している。全員必ず面接して審査し、採用している。

～あるボランティアスタッフの言葉～

この施設では、施設の正規スタッフやボランティアスタッフは、役割が明確になっているので、何をすればよいかわかりやすい。また、5年間現場でインタープリターをやりながら研修してもらえるため、安心して子どもたちに向き合える。

他の施設では、正規スタッフとボランティアスタッフの立場が逆転する（長くいるボランティアスタッフが正規スタッフの員会う役割を侵食する）事態や、長くいるボランティアスタッフを中心に序列が発生することが多いが、ここではそれがないため安心している。

《施設を視察した委員の気づき》

「本物を、本物に近い形で見せる展示の見せ方が面白い。」

展示等の見せ方や、それに着眼点を持った見方などが非常に面白かった。例えば、昆虫をただ見せるのではなく、昆虫の目線から見せるなど、生き物をリアルに伝えようとする迫り方を感じた。本物を本物に近い形で見せることは、ネイチャーセンターに生かせると思う。

「スタッフの説明の必要もなく、

展示が学びを提供している。」

ボランティアスタッフが大勢いたが、そこにある体験型展示などはスタッフが説明せずに使われ、それぞれに気づきを提供していた。だから、人が来て自由に楽しんでもらえるのだろうか。スタッフありきではなく、スタッフがいないときの展示の作りこみ方について、参考になった。



テレビ局にあるシステムと同じものを体験でき、テレビ局の仕事を疑似体験できる



糸電話と同じ原理のパイプ電話のハンズオン展示。二人いて初めて体験を楽しむことができる。

「展示としてセルフで体験してもらっただけでなく、

プログラムにつかえるものがいい。」

買い物体験のレジ体験のブースに多くの子どもが群がっていた。ごっこ遊びに本物のバーコードを使うことができることもあったからだろうが、スタッフがその場につき、「1,000円以内で買い物してね」とプログラムを提供していたこともポイントだと思う。このように、セルフでも学びを提供でき、市民を含めてだれもがプログラムを提供する際に使えるものを考えたい。

「子どものニーズをつかんでいた。

きちんと対象のことを考えていた。」

体を動かすことを促すものがあつたため、子どもが楽しそうだった。子どものニーズを考えている。また、アクションの手順が簡単で、使い方を簡単にイメージできるものが多かったため、すぐに体験を楽しんでいた。

「コミュニケーションの中から気づきが生まれていた。」

2人いて初めて成立する体験（キッズプラザ大阪には、糸電話やパイプ電話などがあつた）では、そこからコミュニケーションが生まれ、気づきが生まれていた。また親子連れの方々の場合、子どもが親に励まされ、モチベーションを高めていた。意図的に、大人数で体験できるものを導入し、コミュニケーションから学びや楽しさを引き出してはどうかと思った。

「自分で準備をしてそれを使うという流れを参加者は楽しんでいた。」

パラパラ漫画の要素を体感できる展示などでは、体験のために自分で漫画用紙を準備し、それを使って体験し、そこから得られたフィードバックをもとに自分で改良し、再度体験するというサイクルが生まれていた。自分で何かをつくり、それをやりきるといった欲求を満たせるものだった。

「日常生活と関係するものだからこそ、子どもが惹きつけられる。」

日常生活の中で大人が何気なくやっているものの中に子どもの興味を掻き立てるものが多いのだと感じた。そして、キッズプラザは、こうした大人世界の気になるものを子どものスケールで本格的に体験することができるというところに魅力があるのだと感じた。この子どもを引き付ける要素を、宝のセルフ展示などにも応用できるのではないかな。



ごっこ遊びのゾーン。スタッフの投げかけでハンズオン展示からプログラムが生まれる。

「子どもを対象にするならばごっこ遊びの

要素を参考にしてはどうか。」

多くの子どもが、ごっこ遊びで自分を発散していたように見える。宝の山で、ごっこ遊びが提供できないかと感じた。生活や自然と絡めた遊びの提供を、宝の山の売りであるフィールドの中で提供できれば、効果的ではないか。

「他の施設と比べることで、改めて

ネイチャーセンターの持つフィールドの魅力を感じた。」

この施設は、遊びのために大人が作りこんでいるが、見方を変えると、子どもの遊びを生み出す力を発揮させられない場となっている。宝の山では、自然を生かし、森の幼稚園のように自分で遊びを生み出す場も提供できないか。施設に閉じ込められた形でのものとは違った魅力ができると思う。

その2 有馬富士公園

《基本的な情報》

この公園は、兵庫県三田市に位置している。公園は兵庫県が公益財団法人兵庫県園芸・公園協会に管理運営を委託しており、公園内の学習センターは三田市がNPO法人キッピーフレンズに管理運営を委託している。



広大な敷地を誇る有馬富士公園。植物や野鳥が多く生息しており、プログラムの材料は豊富。

～有馬富士公園～

年間73万人が来園し、来園者は公園内で自由に遊ぶだけでなく、ボランティア団体の提供する様々な体験プログラムに参加している。こうした体験プログラムに係る部分は、すべて（ねらいや手法の検討、実施等）ボランティア団体にゆだねており、管理運営団体は、連絡調整や備品の貸し出し等を担っている。スタッフは、現場での草刈りや枯れ木伐採、掃除等の現場スタッフが6人、受け付けや団体コーディネート等の事務スタッフが4人に加え、管理する所長、課長の計12名である。現場スタッフは、175.2haに及ぶ広大な面積を管理し、事務スタッフは31のボランティア団体のコーディネーターも兼務している。

～学習センター～

年間11～12万人が来館し、施設の展示を見学し、NPO法人の会員や市の雇用した指導員の提供する環境学習体験プログラムに参加している。この施設は、兵庫県の観光施設の入込客数ベスト10（甲子園などの施設も含まれる）の中に入っており、スタッフはその理由をワークショップが多いなど、体験できるプログラムが多いからではないかと分析している。来館者の目的は環境学習であり、近隣の三田市だけでなく伊丹市や川西市などからも大勢来館している。また、兵庫県では小学5年生に環境教育を義務付けている点も、来館者が多い要因の一つである。



三田市の施設である学習センターでは、NPO法人キッピーフレンズのスタッフが施設を管理運営している。写真は、NPO法人副理事長の小笠原さん。

以前は三田市が民間団体の協力を得て直接経営（プログラムは民間団体が担当し、展示や環境教育の提供、管理は市が担当）していたが、現在はNPO法人に管理を委託し、展示や環境教育については三田市が指導員を嘱託職員として雇用し、提供している。現在、三田市の指導員4名、NPO法人の抱えるボランティアスタッフは30名程度で運営している。また、人と自然の博物館と連携しており、情報交換や講師として職員を派遣してもらうなどの交流を続けている。